

周作クラブ会報

(第87号)
2022年5月25日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

月曜会について	1～2面
原稿発掘	3面
遠藤周作文学館便り	4面
周作クラブ長崎便り	5面
連載・樹座の30年③	6面
私が選ぶ遠藤周作の二作	7面
お知らせ欄	8面

遠藤周作の勉強会「月曜会」の記録から

「スキヤンダル」や「深い河」、

「私の愛した小説」を生んだ学びの会

「日本キリスト教芸術センター」（会長・遠山一行、副会長・遠藤周作、理事長・三浦朱門）は1981年に創設されているが、活動の核となったのは、翌年3月から開始された「月曜会」と呼ばれる勉強会である。ひと月に1回以上のペースで開かれたこの会を一年間体験した遠藤周作は、「色々な刺激をうけ、その刺激の下で勉強させてもらい、大学1年間以上の収穫がありました」と記した。ここで取りあげられたテーマは、キリスト教文学はもちろん仏教思想や神道、イスラム教、さらには音楽、美術、映画、心理学、哲学と多岐にわたり、遠藤人脈の広さを活かして各分野を代表する専門家が講師として招かれた。講話のあとにはサロン形式の懇談会も行われた。この勉強会は計320回開かれたが、遠藤周作の小説『スキヤンダル』『深い河』、長篇エッセイ『私の愛した小説』『宗教と文学の谷間で』などは、この会での学びの結果ともいえる。



奈良旅行にて
左から、上原和、遠山一行、遠藤、遠山慶子の各氏
(撮影：稲井勲)

その「月曜会」の一覧を、本報では今号から3回にわたって紹介してみたい。テーマの多彩さと先見性、そして豪華な講師陣に目をみはると同時に、往時の遠藤周作の関心事がどんなものだったかが知れる貴重な資料である。

(記／加藤宗哉)

月曜会 一覧 ①

日本キリスト教芸術センター
[1982/3～2002/3 全320回]

(1982年・第1回～1986年・78回まで 敬称略)

—1982 (昭和57) 年

金沢正剛 (音楽学者) キリスト教と音楽 [3/1] 三浦朱門 (作家) キリスト教と文学—放蕩息子と葡萄園の労働者のたとえ話をめぐって [3/8] 矢代静一 (劇作家) キリスト教と文学—黄昏のメルヘン、をめぐって [4/12] 遠山一行 (音楽評論家) キリスト教と音楽—オラトリオ「火刑台のジャンヌダルク」をめぐって [4/26] 武田友寿 (文芸評論家) キリスト教と文学—正宗白鳥をめぐって [5/3] 井上洋治 (神父) パウロを追って [5/24] 遠山慶子 (ピアニスト) 私が留学した頃 [6/7] 遠藤周作 (作家) キリシタンからかくれキリシタンまで [6/21] 河合隼雄 (心理学者) 日本人と母なるもの [7/19] 八木誠一 (神学者) 私と宗教 [9/20] 遠山一行 (音楽評論家) バッハの宗教性 [10/11] 八木誠一 (神学者) 統合と場 [11/1] 井上洋治 (神父) 余白と場 [11/22] 上原和 (美術史家) 中近東を旅して [12/6] 森 禮子 (作家) 椎名麟三の宗教性 [12/13]

—1983 (昭和58) 年

山本健吉 (文芸評論家) 命とかたち [1/31] 玉城康四郎 (仏教学者) 仏教の根底にあるもの [2/21] 小田島雄志 (英文学者) シェークスピアとキリスト教 [2/28] 紀野一義 (仏教学者) 仏教におけるアラヤ識 (無意識) と自然 [3/7] 湯浅泰雄 (哲学者) キリスト教と無意識 [3/28] 小島美子 (音楽学者) 日本音楽の古層をめぐって [4/25] 岩本泰波 (宗教哲学) 仏教とキリスト教の対比 [5/23] 小泉文夫 (民族音楽学者) 今、なぜ民族音楽か [5/30] 八木誠一 (神学者) 戦後日本におけるイエス像 [6/6] 松永希久夫 (神学者) 聖書は事実通りにイエスの言動を書いているか—現代のイエス諸像の問題をめぐって [6/27] アルフォンス・デーケン (神父) 生きることの準備と死への準備 [7/4] 永藤 武 (日本文学者) 日本人と讃美歌—別所梅之介を中心に [9/19] 石田友雄 (聖書学者) ヘブライズムとキリスト教 [10/3] 吉村作治 (考古学者) イスラム世界 [10/17] 堀田雄康 (神父) 聖パウロとヘレニズム [11/28] 奥村一郎 (神父) 禅とキリスト教 [12/12] 伊藤昌輝 (外交官・翻訳家) 神道と日本人の宗教感覚 [12/19]

—1984 (昭和59) 年

永田 仁 (音楽研究科) イングリッシュチャーチと教会音楽 [1/30] 海老沢 敏 (音楽学者) モーツァルトとその宗教性 [2/13] 高階秀爾 (美術評論家) イエス像の変遷と芸術家の自意識 [2/27] 若桑みどり (美術史学者) 反宗教改革期におけるマリア像の変遷 [3/12] 東川誠一 (音楽学者) バッハまでのドイツ・プロテスタント教会音楽史 [3/26] 高橋康也 (英文学者) ゴドーとキリスト [4/16] 金岡秀友 (仏教学者・僧侶) 日本人と密教 [5/7] 高見沢潤子 (随筆家) 小林秀雄とキリスト教—兄の人となり [5/21] 船越保武 (彫刻家) 私の仕事 [6/4] 村上陽一郎 (科学史家) キリスト教と科学 [7/2] 小野寺 功 (哲学者) 西田哲学とキリスト教 [9/17] 江川 卓 (ロシア文学者) ドストエフスキーとキリスト教 [9/24] 三橋 健 (神道学者) さすらいの唄—日本人の底にあるもの [10/15] 小野寺 健 (英文学者) 現代イギリス文学とキリスト教—その諸相 [10/22] 西尾幹二 (独文学者) ニーチェと現代 [11/26] 上原和 (美術史家) ガンダーラの弥勒菩薩とキリスト教 [12/17]

—1985 (昭和60) 年

東 敦子 (声楽家) 世界を駆けめぐるのオペラ談義 [1/28] 今道友信 (美学・哲学者) 高度成長社会における芸術と宗教 [2/4] 若林 真 (仏文学者) A・ジッドにおける宗教性 [2/25] 西村恵信 (仏教学者) キリスト教と私の不思議な因縁 [3/18] 大村はま (国語教育家) 大正時代の横浜海岸教会から [4/8] 秋山 駿 (文芸評論家) 犯罪と文学 [4/22] 河合雅雄 (霊長類学舎) 霊長類のインセストタブー [5/13] 林 道義 (日本ユング研究会会長) 日本人における男性性 [5/27] 氏原 寛 (臨床心理学者) 悪について [6/10] 稲富 昭 (建築家) 教会建築—鎌倉雪の下教会 [6/24] 東 敦子 (声楽家) オペラ「イリス」について [7/22] 篠原大作・花形恵子 (夫妻。俳優・声優) 詩を演ずるところみ [9/30] 野沢重雄 (実業家) トマトの巨木の生命思想 [10/21] 吉野裕子 (民俗学者) 陰陽五行をめぐって [11/18] 曾野綾子 (作家) 私のパウロ像 [12/16]

—1986 (昭和61) 年

上原 和 (美術史家) 藤ノ木古墳 [1/20] 丘山 新 (仏教学者) 仏教—インド・中国・日本 [2/10] 吉野裕子 (民俗学者) 陰陽五行の概説 [2/24] 三善 晃 (作曲家) 日常の科のなかの非日常 [3/10] 中村 元 (仏教学者) 仏教・キリスト教 [3/31] 渡辺義愛 (仏文学者) サンテクジュベリと言葉 [5/26] 石川光男 (生物物理学者) ニューサイエンス [6/30] 角田忠信 (医学者) 日本人の脳 [7/14] 須賀敦子 (エッセイスト・イタリア文学者) ダンテ「神曲」について [9/22] ひろさちや (宗教評論家) 仏教とキリスト教 [10/6] 熊井 啓 (映画監督) 映画を語る [10/30] 大岡 信 (詩人) 日本詩歌の「色」 [11/17] 村木弘昌 (医学者) 丹田式呼吸法について [12/8]

(つづく)

遠藤先生が大切にされた空間

清水 優子

昨年亡くなったピアニスト遠山慶子さんの演奏する曲を、長崎の「レコード鑑賞会」で皆が聴いたという記事を会報85号「長崎文学館便り」に読んだ。私もよく憶えている。平成12年5月13日、遠藤周作文学館の開館式典に続く記念行事で、慶子さんはヴァイオリスト塩川悠子さんと、モーツアルトのヴァイオリンソナタを演奏した。海が見える文学館の展示室に置かれたスタインウェイのピアノは、慶子さん愛用のもので、この日のために東京の自宅からわざわざ運び込まれた。あのとき、「遠藤さんのために弾くんだったもの。心を込めた最高のものをとどけたい」と言うつてニコッと微笑んだ慶子さんの表情が忘れられない。大の慶子ファンだった遠藤先生もさぞかしご満悦だったと思う。

「君にびつたりりの、居眠りし放題の仕事があるからやってみないか」と

と遠藤先生から「日本キリスト教芸術センター」(通称センター)に誘われたのは、もう40年近く前になる。私は当時真面目に勉強をしたわけでもない普通の女の子だった。

「センター」は東京・青山のマンションの2階にあった。多くの本が置かれた部屋と会議室、それに広い食堂があり、ペンクラブ出身の仲間さんが一人で業務を取り仕切っていて、私はその補助として勤務することになった。

そこがどんなところかも分からなかったが、年に一度の理事会や月に一度の「月曜会」に姿を見せる顔ぶれと、その方たちによって繰り広げられる話題に

「居眠りし放題」どころか、「瞬きすらもつたいない場所」だと気づき、私は青ざめた。遠藤先生は、「ここにある本は好きなだけ読んでもよい」それから、あとは一つだけ、「センター」に出入りする人——とくに遠山慶子さんの在り様をよく見て学びなさい。やがて君の財産になるから」と言った。

その慶子さんを始め、三浦朱門さん、井上洋治神父、三雲夏生さん、矢代静一さんと、会員には錚々たる方々が名を連ねていたけれど、編集者、会社員、主婦、学生も加わっているのが新鮮だった。「キリスト教芸術」と銘打っていたものの、宗教にこだわつてもいなかった。かつて慶子さんがヨーロッパ留学時代に体験したサロン——人々が有名無名は関係なく出入りし学んだ「カザルスのサロン」の話聞いた遠藤先生が、自分たちもそういうサロンを作りたいといつて設立した、と聞いたことがある。

「月曜会」は1時間ほどの講師による講話の後、別室でビールとサンドイッチでのディスカッションとなるのだが、その中心は遠藤先生と、チャタリングで聡明な慶子さんの発言だったと思う。遠藤先生は精力的に各方面からの講師招聘につとめた。A・デーケン神父、後にノーベル賞を受賞した小柴昌俊さ



日本キリスト教芸術センターにて (筆者と) (撮影: 稲井勲)

ん、そして加賀乙彦さんも講師で来たのが縁でそのまま会員として積極的に会へ参加するようになった。遠藤先生と井上神父、慶子さんは同じ3月生まれなので「卵の会」と称した誕生会が麻布の遠山家で開催されていた。奈良へ大和路を訪ねる旅行にも出かけたし、外海町の「沈黙の碑」除幕式へも皆で参加した。そこでの遠藤先生はいつものじつに楽しげで上機嫌だった。

「少し時間があいたから」と、センターへ本を読んだり碁を打つためにふらりと立ち寄ることもあった。劇団樹座の仲間たちとパステル画を習い描いたのもセンターの一室だった。そして晩年、病に伏した先生が車椅子で短い時間参加した遠山家でのパーティーで、「帰らないよ」と涙ぐんでおられた光景も胸に焼きついてる。先生にとつて、あの青山の裏通りにひっそりとあった「日本キリスト教芸術センター」は、かけがえのない空間だったのだ。その空間に身を置くことが出来た事は、まさに私の財産になった。遠藤周作という稀有な作家の人生を考えると、センター」とそこに集つた慶子さんを始めとする仲間たちとの時間を忘れることはできない。